

あがたい
縣居翁・賀茂真淵は郷土の誇り、日本の宝

ご挨拶

賀茂真淵翁遺徳顕彰会 会長 山下智之

享保八年六月二十一日 月次会

兼題二首 光治雑掌

この日「月次会」の参加者は杉浦国頭、服部保庵、実栄、賀茂政藤、真野方塾、藤原光治、杉浦真崎、伊律、源安連、源清兼の十名。

読師は賀茂政藤、講師は真野方塾で、それぞれが「夏月涼」、「山家鳥」二首ずつ歌いました。

夏月涼

短夜の 庭の笹垣 風こへて

秋もへたてぬ 露の月影

（短い夜には、庭の笹垣を風が越えて秋を止めてしまふ。そんな露に月影が映っていることだ）

山家鳥

すむやたれ 庵しつかなる 山陰に

名も知らぬ鳥の 声はかりして

（ここに住んでいるのは誰であろうか。庵は静かで山陰には名の知らない鳥の声ばかりが聞こえてくる）

賀茂政藤（二十七歳）

真淵の自然に対する観察力はとても細やかでした。短い夜というのは秋の様子を感じさせてくれます。

庭にある笹の垣根も風を遮りましたが、露に映る月影が涼を運んでくれたようです。また山陰から聞こえてくる名も知らない鳥の声が軽やかで、庵の主が羨ましかったようですね。

平成30年4月23日に代議委員会が行なわれました。

代議員会承認事項

- (1) 平成29年度事業報告
- (2) 平成29年度会計報告
- (3) 平成30年度役員・会員構成
- (4) 平成30年度事業計画
- (5) 平成30年度予算案
- (6) 当面の境内修繕等
- (7) 会員宛事業報告と継続依頼

賀茂真淵翁を知ろう (7) 杉浦家和歌会

真淵を育てた杉浦家和歌会

真淵の国学の特色は、その歌文的性格にあると言われる。

真淵自身の素質、好みによることは確かだろうが、若き日の真淵をはぐくみ、育てた遠江の文化環境に、杉浦国頭や真崎たちが中心となった杉浦家の歌会があった。真淵が出席した享保6年（真淵25歳）頃は月並歌会だった。

享保7年正月、国頭の邸に国頭夫妻を中心に23人が集まり和歌会を開いている。参加者の身分は多様で、五社神社の森暉昌（てるまさ）、蒲神明宮の蒲清兼ら神官仲間、教興寺の上人其阿（しょうにんごあ）ら、医師の服部保庵ら、町人の穂積通泰ら、女性の柳瀬理津らが入っている。

中でも歌論書『秋夜随筆』の柳瀬方塾（まさいえ）や漢学者渡辺蒙庵や叔父服部保庵が入っていて、真淵は方塾から和歌革新の心を、保庵・蒙庵から老荘思想・古文辞学の影響を大きく受けた。「和歌会定」には「その家のわざにおこたる事なく、その身のつとめわするゝ事あらずして」と明記される。

和歌会は、杉浦家だけでなく享保7年8月には【政藤家】でも行われた。

吟行にも出かけた。享保9年2月には万斛村甘露寺の梅見の会、四月神立社（蒲神明宮）でも真淵は詠んでいる。

歌会での真淵

真淵は、この和歌会の三年間で131首詠んでいる。政藤の名で101首、政成で27首、他に成政で三首。また歌会には役割があるが、真淵も講師4回、読師2回、雑掌1回、雑餉2回つとめている。

このようにして、真淵の歌才は、人々に認められ重んじられていた。



享保七年寅年二月十八日月次会 兼題二首 賀茂政藤雑掌

浜松近郊の真淵歌碑 西区村櫛町

涼みとるかも
 よる波みつゝ
 あらゝ浜松
 遠つあふみ
 本ごとに
 賀茂真淵

宝暦13年（1763）真淵六七歳 真淵が浜松に戻ったときのもの。「浜名湖岸のまばらな松の根本へひたひたと寄せる波、その松の緑と白い波の清新な涼しさに身も心も満たされる」の意とされる。



昭和57年、浜名湖周辺地域観光振興協議会が浜名湖周遊文芸自転車道・文学碑として14基を建立



文学碑設置場所

- | | |
|---------|--------|
| ①河合 象子 | ⑧北原 白秋 |
| ②佐佐木信綱 | ⑨原田 浜人 |
| ③香川 景樹 | ⑩石塚 龍麿 |
| ④里村 紹巴 | ⑪賀茂 真淵 |
| ⑤富安 風生 | ⑫鷹野 つぎ |
| ⑥久米 正雄 | ⑬竹村 広蔭 |
| ⑦田辺 友三郎 | ⑭加藤 雪腸 |

当会が発足して2年が経過いたしました。平成30年度は、さらに活動の場を広げていきたいと思ひます。今年度も引き続きご支援を継続してまいりますよう、よろしくお願い申し上げます。